

岡山県知事賞

屋号から始まった地域への関心

久米南町立久米南中学校

二年生 山本光哉

「いんきよかな。光哉に明日、畑に来てもらえんかなあ。」

「かどもと屋」の恭子さんからの電話だ。夏休みになると、一週間のうちに何回電話がかかってくるだろうか。

「かどもと屋」というのは屋号だ。僕の住んでいる地域は、お互いを名字で呼ぶことはほとんどない。昔から家についた名前「屋号」で呼んでいる。地域の家は五十軒ほどだが、名字はたった三種類しかない。僕の家は「隠居」なので、隠居の光哉だ。

かどもと屋の恭子さんや祐一さんは、ぶどう農家だ。ぶどうを作りながら、地域のお世話もいろいろとしている。

僕の住んでいる地域は、農家が多い。農家ではない家もいく

つかあるが、ぶどうや野菜を作っている農家がほとんどだ。僕が生まれた頃から、他の県や地域から、ぶどうや野菜作りで生活をしようとして来る人が多くなってきたそうさ。そんな人たちの相談にのったり、いっしょに何かをしたりするときの中心にいるのが、かどもと屋の恭子さんや祐一さんたちだ。

「山手に来てもらって、いやいや、他の県からわざわざ山手地区を選んで来てくれとる人らに、何かせんといけんと思うてなあ。」

と、祐一さんはいつも言っている。僕も小さい頃から、お世話になってきたから、祐一さんのこの言葉を何度も聞いてきた。

小さい頃は、新しくやって来る人の家を探したり、新しくぶどうを作る人の畑を探したりして、何かをしてあげるのかなというくらいしか思ってなかった。しかし、今は祐一さんの言葉の意味が僕の中で少し変わってきた。

新しく来る人に何かをしてあげることが一番ではない。祐一さんは、山手の事を一番大事に思っている。山手地区を大事にすることを、まず考えて、みんなが何かをする。そのことが新しくやって来る人のためにつながっているのだ。

秋から冬の四ヶ月間、毎週金曜日の夜に地区のみんなが集会

所に集まって、みんなで夕食を食べたり、地区の話をしたりする会がある。僕たち子どもたちも参加する。

何年か前の年には、「屋号」の話になったことがある。僕が小学生の頃のことだ。

「あそこの家の屋号、なんじゃったかなあ。」

「本家じゃろ。」

「いや、うちは辻屋いうてようるで。」

「私はお嫁に来たけんよう知らんわあ。」

と、お酒に酔った大人たちは大騒ぎだった。

しかし、次の週、その次の週も、屋号の話をしているうちに、父たちは不安になったらしい。僕たちの地区に、昔から伝えられてきた「屋号」が、地区のみんなから忘れかけられていることに気づいたからだ。

地区には、百四歳になるたまさんがいる。たまさんは毎日元気がだ。僕がスクールバスに乗っていると、畑仕事をしている。僕も道で出会うと必ずあいさつをする。地域の辞書みたいな人だ。そんなおばあさんたちが何人もいるのが山手地区だ。

「たまさんやこうがおるうちに、調べとかんと、そのうち分からんようになるで。今しかないわなあ。」

と、祐一さんや恭子さん、父たちは、たまさんたち高齢者の方が集まる行事のときに、いっしょに参加して屋号のことを聞いていた。

「あそこの家とあそこの家はなあ、もともとはいっしょじゃったんじゃけど、分かれ屋で新屋しんやになったんよ。」

屋号は、家と家とのつながりや地区の歴史も教えてくれた。

「人のおらんようになった家はくずれて、そのうち山になる。畑も、手が入らんようになったら、山になっていくけんあ。」父は何週間も屋号を一生懸命にメモしていた。

山手地区にも、人が住まなくなつて、家がくずれ、山になっているところがあちこちにある。家がなくなるといふことは、長い間地区で使われてきた屋号も山手から消えてしまう。山手に住む人の記憶からも消えてしまう。そして、一度消えてしまったら、屋号が復活することはもうないだろう。

空き家を減らすことが地区を大事にすることになり、屋号を守ることになる。新しくやって来た人のことを、最初はみんな名字で呼ぶかもしれない。だが、その人が屋号を使いながら山手に住んでいるうちに、きっと屋号で呼ばれるようになるだろう。

新しくやって来る人のために何かをしてあげるのではなく、地区の人みんなが屋号を守り、地区を大事にする気持ちを持ち続けることが、大切なことなんだと思う。自分の地区のことが好きで、地区を大切にしようと思うから、新しくやって来てくれてありがとうという気持ちになれるのだ。

それが祐一さんの言葉のもう一つの意味だと思うようになった。

かどもと屋からの電話で、今年の夏も、ぶどうの手伝いに行くことになった。その時に僕が思ったことを話してみようと思う。